

## 保育園の自己評価・考察・課題

### ● 職員の自己評価から、考えること

2019年度、ヒッポ保育園の開園1年目の職員の自己評価について1年に1度、このようなチェックリストをおこなうことで、日ごろの自己の保育について見直す良い機会になるのではないかと思います。

最初に……

自己評価を終え、各職員との面談を実施した。

その中で、感じたことは、それぞれに、保育感を持っている。特に保育歴の長い人は、確固たる保育感の下で、保育をしているので、組織の中の保育方針、保育目標、に添えずに悶々としながら、保育の現場に立っている職員もいることが分かった。

このような職員間の不協和音を、どのように調節し、改善していけばいいのか、とても、難しい問題だと思う。こういう場合、考えが合わない、保育感が違う、という事で、どちらかが保育現場を変わっていくというのが、どこの施設でも発生していることだと思うが、しかし、そのような解決方法では、トカゲのしっぽ切りのようなもので、本質的な問題解決ではない。ある意味、保育の質を問う以前の問題でもあるように思う。こういう状況下では、どうしても職員間の輪が回れないし、何よりも子供たちにとって良くない人的環境という事になってしまう。それぞれが、反発し合うのではなく、互いにその考えを受け止め、理解しようと努力することが必要ではないだろうか。

互いが、人として、大人として成長し合う機会ととらえることはできないものか？

保育士ひとりひとりが高い専門性と豊かな資質を持つことは必要なことだが、個々の力量の向上にとどまらず、保育士集団としてのまとまりと、それに伴う保育力の高まりが必要となってきます。職員間のチームワークをよくしていくためにも、いろいろな形での話し合いの場を作る事、話し合える職員間の雰囲気作りをしていくことにも、心がける必要があると考える。

### ● 保育園としての自己評価と、今後の課題

平成27年度の新制度が施行されて以降、子ども達を取り巻く環境は大きく変わってきました。待機児童解消という社会的な流れのなかで、こども園や小規模保育園が多く開園しました。ヒッポ保育園も、その中の一つです。このような社会現象の中で、保育園として質実ともに生き延びるためには、保育の質が大きく左右するのではないかと考えます。あえて保育園という場に残り、子供たちと関わる保育士の質は重大な要素です。そのためには、私達が、現状に甘えることなく、自己を厳しく見つめ、社会人として、保育人としても、切磋琢磨して、研鑽を積まなければなりません。そして、自分の保育感にとらわれるのではなく、今、目の前の子どもの現実をしっかりと見定めてその視点から、保育を考え、保育を展開していくことが必要であると考えます。

そして、子供だけではなく、その保護者とどのようにかかわっていくかということも、とても重要な問題になってきました。今の若い保護者が、「子育てを知らない」「子供の成長・発達を、正しく見ることが出来ない」問題を、保育の現場から、どのように発信し、導いていけばいいのかを、考える必要があります。

今保育園に求められているのは、保育の質の向上や、子どもの成長への手助けはもちろんのこと、保護者や、さらには地域との連携、また子育て全般での「支援」ということでもあると思います。

私たち保育園、保育士は、幼児教育の見地からだけではなく、幼児福祉の面からも、「支援」という、その社会的役割をしっかりと認識しておくことも、私達に課せられた任務かもしれません。その為にも、以下のことを考えます。

- ② 保護者、地域との連携をどのように強めていくか？
- ② 忙しい就労条件の中で、自己を研鑽すべく時間をどのように確保すればよいか？
  - 保育園外での研修会参加の保障
  - 保育園内での研修会、研修時間の確保
  - 研修後の保育実践の確立

#### 園長として

保育士ひとりひとりが高い専門性と豊かな資質を持つことは大事であり、これは保育園の永遠の課題でもあります。が、個人の力量の向上にとどまらず、保育士集団としてのまとまりと、それに伴う保育力の高まりも、重要なことです。

職員間のチームワークをよくしていく為にも、色々な形での話し合いの場を作る事、話し合える職員間の雰囲気作りをしていくことが、必至です。

職員を育てていくことが、園長として課せられた重要な任務です。その為にも、園長自身が日々研鑽に努めなければなりません。